

さまざまな問題点を協議するために、1910年、エディンバラで世界会議を持った。同会議の第7分科会は「宣教と政府」を主題にしていたが、その報告書には、アジアでは日本、中国、インド、オランダ領東インドの状況が報告されている。同会議の報告と討議を見ると、宣教師が西欧諸国の植民地主義と同一視されてきたことの問題性がはっきりと指摘されている。しかし、西欧の文明を伝達し被宣教地の民衆の福祉を向上させるという「文明扶植論」は極めて濃厚であり、また福音を全世界に伝えねばならないとする「使命感」も強い。植民地における宣教政策を世界的に調整することに重きを置いた同会議では、被宣教地での軋轢を回避するために、政教分離（政治不干渉）、原住民の宗教・社会制度（とくにイスラム）に対する慎重な態度、宣教活動や原住民クリスチャンへの圧迫があっても本国政府の介入を要請すべきでないこと等、いくつかの原則が提言されている。世界の植民地政策の流れが直接統治から間接統治に移行したことに応じて、宣教政策も政教一致から政教分離へ移行したものと思われる。また「倫理政策」等と呼応して、教育や住民の福祉向上に対する宣教師の役割が強調されている。全体的に西欧中心主義は拭えず、植民地における軋轢に対する自己批判的分析も弱いが、戦後のプロテスタント教会の世界宣教の出発点としての意味は大きい。

北スマトラにおける港市国家と後背地——弘末雅士

北スマトラは古くから国際海洋交易活動の舞台の一つとなり、河川の河口付近に港市国家の成立を見た。とりわけ15～17世紀にかけて海洋交易活動が活性化した時代には、アチェ、パサイ、バルス、アル（デリ）等の港市国家が隆盛した。また18世紀終わりから19世紀前半にかけて、ペナンやシンガポールとの交易が活発化すると、東岸のデリ、アサハン、シアク等が繁栄した。これらの港市の後背地は、豊富な降雨によって形成された森林や河川盆地を有し、港市に森林生産物や米、家畜を始め、胡椒、タバコ、ガンビール等の商品作物また奴隷を搬出した。

報告者は、従来交易活動の活性化が港市の後背地に対する影響力の強化をもたらし、文化的にも前者が後者を組み込んでいくと指摘されたのに対し、内陸バタック地区と周辺港市との関係を通して、港市と後背地とのネットワークの強化が必ずしも前者の後者に対する一義的支配に結びつかず、後背地側に港市の経済活動を補完する権威が形成されたことを説明したい。

港市は、上述した時期後背地からの産物の調達をはかるため、バタック地区の産地にバタック族の代官を任命し、産地との関係の強化を図った。内陸部の人々の港市支配者に対する尊崇の念は強く、産地と港市との交易関係は維持された。ところでこの一方で、内陸部の人々は、自らの生産活動の基盤を保障する権威を必要としていた。港市支配者は、後背地の人々から豊穡をもたらす力を有すると信じられたが、実際港市から内陸部に食料を供給することはきわめて困難であった。バタック地区の内陸部トバ湖畔に農耕を司る力を有すると信奉された神聖王シ＝シンガ＝マンガラジャが成

立したのは、こうした事情による。そして港市側もこの神聖王の權威を認め、後背地との相互依存関係を強化することで、上述した時代に対処したのであった。

15・16世紀のチャンパーとヴェトナムとの関係———和田正彦

チャンパーの歴史についての専著には、G.マスペロの『チャンパー王国』とR.C.マジュムダールの『チャンパー』があることはつとに知られている。しかしヴェトナム後黎朝の南進政策によって1471年に事実上ヴェトナムの属国になって以後の歴史については、この2書も記すところは極めて少なく、ほかにこの時代のチャンパーの歴史を扱った研究論文も皆無に近い状況である。

ヴェトナム後黎朝の聖宗は1471年にその都ヴィジャヤ（闍婆城、現ヴィン・ディン）を包囲して3万人を捕虜にし、4万人を殺したのち、チャンパーの旧領の5分の4を併合して廣南・升華の両承宣を設置した。その後、南方のパンドゥランガ（藩郎、現ファン・ラン）に移ったチャンパーは、1693年には廣南の阮氏の“南進”によって、その名を順城鎮と改められて藩属国となり、その独立性を奪われた。

しかし、チャンパーは、1471年の後黎朝の聖宗の親征以後、1832年に阮朝による改土帰流によって順城鎮が廃止され、ヴェトナム人官吏によって直接統治されるまでは、はじめは後黎朝の、16世紀後半以降18世紀末までの鄭阮両氏による南北抗争期は廣南の阮氏の、そして19世紀初頭は阮朝の支配下で、時代によって程度の差はあるが、領土を侵蝕されつつも、占城国および順城鎮として半独立の地位を保っていたことが、『大越史記全書』、『欽定越史通鑑綱目』、『大南寔録』などヴェトナム側の史料から知られるのである。

さらに注目すべきことは、事実上ヴェトナムの支配下に入った1471年以降も、チャンパーは中国の明朝と朝貢関係を数十年にわたって維持していたことである。このことは『明實録』の記事から知られる。この事実はどのようなヴェトナム・チャンパー両国内事情および国際関係を反映したものであったかを、『明實録』の記事やヴェトナム側の史料から考えてみるのが今回の発表の目的である。

英国小説のなかのインド・東南アジア

—“白人の責務”から“支配するものが腐る”まで———小泉允雄

英国の近代小説にはインドに生きたキプリングや航海者として南の島々を体験したJ.コンラッドを始祖とする、いわば「インド・東南アジアもの」というべき、一つの伝統がある。それは『インドへの道』のフォスター、『ビルマの日々』のオーウェルで終わることなく、戦後の現代作家たちにも引き継がれている。帝国主義に栄光を見たキプリングから、「威張るものが先に腐る」ことを発見したオーウェルまで、その流れは、植民者側の帝国意識やアジア・イメージの変化の歴史を写し出す。それとともに、それらの小説群は植民地時代末期のビルマやマラヤでの白人社会の悲喜劇をいきいき